

# 丸山先生へ厚い感謝

17年卒業 田崎泰子

三才で父を亡くした私は、小学校卒業、当然のように仕事と夜間部に入學、次に保母夜間に入り、資格を得ました。この資格は女学校卒でなければ許可されないものでした。初代の丸山校長は昼働き夜学女子と同等の資格を与えることを文部省に足しげく通われ、十二年認可。夜学さちがいとまで言われて。そして次々に他の夜学も認可されたことを、同窓会で松田先生か

ら伺いました。ひしひしと丸山先生に感謝の気持ち一杯です。先生は質素な詰襟の黒い服、背の高いスラッとした、夜の廊下ですれちがった笑顔、もう五十年過ぎた今も私は覚えています。一人の教育者のこの心にあたたかい考えが、今も続き日本中の夜間の生徒に光を与えあげがたく、尊いことです。七十一才の私は今も元気に保母の仕事が続けています。ありがとうございます。



## 秋近し

18年卒業 松本チエ

(旧姓前田)

古稀を過ぎた今、米し方を思うとそれはただ一睡の夢のように思える。かと思えば長い長い旅路の果てに漸く辿りついたような気もする。

自分がよつもりでした。とでもそれが知らず知らずのうちに人を傷つけていたのではないか。この脚の痛みを甘んじて受けよ。もつと静かな安らかな心にならなくてははいけないと思いはじめた。

神様があと何年生かして下さるか解らないけれど、とにかく老夫婦助け合って静かに暮らしている現在を心から感謝している。

どんなに痛くても「こんな畜生!!」等と怒ってはいい。それは只自分の痛みを増すだけなのだ!! 漸くこんな風に思えるようになったら不思議なことに脚の痛みが前ほどとなくなくなって来た。確かに膝は痛いけれど、とにかく歩ける。

二ヶ月位前から右足の膝が痛んで何とも辛い。最初の頃は余りの痛さに腹立たしさを覚えたが今では、何か私の足りなさを神様が教えてくれるのではないか。

三田高校の門をくぐったのは、二年の春である。都外からの転入だった。元府立第六高女とは聞いていたが、女子だけのクラスです。華やかで大人の雰

## 恩師を偲ぶ

38年卒業 矢内和明



学校内では先生は少しガ二股で歩かれ何時も白衣をガウンカコートの襟に着こなしで居られました。

専任教科目は生物でした。その名を中村泰造先生と言えは知って居られる方は私共と年齢が近い方です。昭和三十八年に卒業し、その後千葉の御自宅に伺った時に、先生とは仲々切れそうもありませんでした。

で居た頃のなつかしい声だと思いついたのも束の間、「貴方の年賀状に何時も近況を書いて寄越すのでなつかしそうちに主人は読んで居ましたよだからお電話をしたの。」と言われた時、私のする事は分かって居ました。すぐに同窓生名簿よりクラスメートを選び出し片々端から電話を掛け始めました。嫁が居たり、仕事上の都合があったりして掛

この歩けるということに感謝をしなくてははいけません。若し歩けなかったら大変なことだ。こうして、痛みを感じながらもとにかく歩けるのだ。若ししたら一生おられないかも知れない。ひょっとしたらなおるかも知れない。でも私は生きていくということに感謝しつつしっかり生きていくことを思っている。

ところが今年の二月十七日に奥様よりお電話が有り何んと先生が亡くなられた由、奥様を川崎さんと呼ん

り立ち寄ったのも懐かしい。給食を入れると四食、五食の毎日だった。都電の走る慶応通りを赤羽橋に向かうと、正面に東京タワーが建設中で、日々刻々と高くなるのも驚きであり楽しみだった。完成したタワー全体に電気がともった日の感動を今も忘れない。

三年のクラス替えて男子の多いクラスになった。男女仲がよく、お互いを認め合ってそれぞれに個性的で自立していた。そんな友達がすてきで私の白慢になっていた。

数年前、同窓会に出席した折、三田高校付近の様子が一変しているのに、ショックを受けました。交差点にあった三田警察署はなくなり、立派なビルが建ち並んでおりました。もちろん、校舎も五階建てのビルに変身。ただオセンチ山の移築して残され、ホッとしました。私が三田高に在学した時代は、昭和三十年代の後半、マンションが出現しはじめ、高度経済成長の胎動期でした。

夜とも学校にお世話になっておりました。クラスも、3組あり、友人との語らい個性あふれる先生方の授業等、楽しい思い出がいっぱいで、いろいろな事を吸収できました。卒業後、学校事務職員として就職し、現在も小学校に勤務しております。あれから、三十年あまりの月日が流れました。現在、東京の街並みは、古い建物がおしげもなく壊され、変貌しつつおられます。物質的には豊かになっても、何か大切なものを失い、迷子になってしまった気が分ります。これは老年期にさしかかった者の感傷のためだけにしようか。

## 思い出あれこれ



36年卒業 松井淳子

三田高校の門をくぐったのは、二年の春である。都外からの転入だった。元府立第六高女とは聞いていたが、女子だけのクラスです。華やかで大人の雰

囲気があって皆やさしかった。次に、体育で水泳を学習した。水泳は得意だったが浮きにくく泳ぎにくいという

田町駅の森永口に、古びた小さなラーメン屋が確か上下に二軒あり、学校の帰

居りました。既に当時の一組担当の佐藤和男先生が同窓生の池田(旧姓伊藤)コト子さんと御慶香を済ませられて居りました。祭壇は一番上にあのなつかしい山行帽を被りこちらを斜めに見て居られる遺影が飾って有り胸の詰まる思いをしました。二人で帰途館林駅のホームの上に雪が降っていたの

がまるで映画みたいなきり気でした。後日亡く人となられた奥様より改めて御挨拶状を戴き先生との現世での会話は途切れる事に成りました。恩師の不幸は一種独特の思い出が有り、しばらくは寂しさが消えず昔を偲んだ日々を過ごした次第です。

39年卒業 今村代世 (たかよ)

## 思い出



下校時を 星空にも告ぐ 時計台

